

---

## 「句動詞の研究」始末記

橋 本 光 憲

私と句動詞 (Phrasal Verbs) との関わり合いは十数年前に遡る。当時、平塚キャンパスでの教員就任が予定されていた。その準備のつもりで、英語関係の参考書を20冊程読んだ。その中で、「受験英語を活用しよう」といった類の本が2、3冊あった。受験英語のよしあしは別として、大学でこの蓄積を活用しない手はない。受験英語で文法はよく勉強しているし、さらには口語英語にも応用できるとの意見もあった。

その中で、意味の曖昧な make out, turn down などの句動詞を覚えるよりは、意味の明解な understand, reject を使って、充分用が足せるといった意見があった。言い換えれば、字面からは意味の取りにくいアングロ・サクソン系の言葉より、ラテン系の一語対一語対応の言葉を活用してはどうか、ということである。両者の関係は、日本語で言えば「やまと言葉」対「漢字」という関係に置き換えられよう。

事実、英米人に句動詞を多用されると、ノン・ネイティブである我々には、意味が取りにくくなる。私が専門としているビジネス英語は、ネイティブ対ノンネイティブだけでなく、ノンネイティブ

対ノンネイティブの関係を重視している。英語学者には「英語をあるがままに受け止めよう」とする人が多いようで、英語に何らかの使用制限を加えることを嫌うようである。しかし、国際ビジネス・コミュニケーションの場で、ネイティブ側に果して英語を好き勝手に使わせるのが、「正しい」と言い切れるだろうか。

私の句動詞の研究は、句動詞そのもの研究ではなくて、国際ビジネスの中での句動詞のあり方を問うものである。1990年に、ビジネス・コミュニケーション学会 (本部：米国—略称ABC) の専務理事、Dr. John D. Pettit, Jr. が来日して、“... Thus, we should avoid them (ambiguous phrasal verbs and culturally derived words) in our international communication efforts.” と理解を示す発言をし、英語国民側とも問題意識を共有できることを声明したのは意義深い。

その後数年、私は米国での会議や、ニュージーランド (ここでは Rachel McAlpine, Global English for Global Business, Longman, Auckland, 1997 という同主旨の冊子がでていいる)、シンガポール、そしてさる8月には京都でと、発表を続けた。

---

京都では、句動詞の中で、非英語国民にとって意味の曖昧な27の二語動詞と47の三語動詞を指定し、

更にその代案の英語例を提示した。これで一連の句動詞研究に終止符を打ったのである。

---